

2024年3月17日大齋節第5主日説教

エレミヤ書31章31-34節

ヘブライ人への手紙5章5-10節

ヨハネによる福音書12章20-33節

大齋節も第5主日となりました。大齋節第5主日の特祷は、「全能の神よ、み子イエス・キリストは大祭司として来られ、その血をもって至聖所に入り、ただひとたび永遠の贖いを全うされました」とあります。「大祭司キリスト」という表現がありますが、その基となった聖書箇所は、本日の使徒書である「ヘブライ人への手紙」です。それゆえ、本日は、使徒書を中心に学びたいと思います。《》の部分も学びます。

「ヘブライ人の手紙」(以下ヘブル書)は、「手紙」と呼ばれていますが、ほかの使徒書とは異なり、どちらかという神学的主張の強い「教書」的な文書です。特にキリストが大祭司であるという、独特な神学的主張があります。この部分は、そのキリスト大祭司論展開の序に当たりますが、手紙の著者は、まず大祭司とは何かを説明します。

「大祭司は皆、人々の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える務めに任命されています」(ヘブル5:1)この説明で、大祭司についてすべて説明したとは言えないかもしれませんが、大祭司という職務の本質的な事柄について示しています。次に「この大祭司は、自分も弱さを身に負っているので、無知な迷っている人々を思いやることのできるのです。また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のための供え物を献げねばなりません。また、この光栄ある務めは、誰も自分で得るのではなく、アロンのように神に召されて受けるのです。」(ヘブル5:2-3)と述べます。この部分は著者固有の大祭司解釈といえます。大祭司が人間であるがゆえに、弱さを身に負う者であること、しかし、そうであるが故に、無知で迷う者を思いやることの出来る方であること、さらには、他者と同時に自分自信の罪のために、主なる神様に犠牲と供え物を捧げる存在でもあること、最後に人間であるが故に、大祭司としての栄誉は、自分によってではなく、主なる神様によってのみ受けるものだと述べられています。この説明は、歴史上存在した大祭司像とは大きくかけ離れています。実際にはこのような理想的な大祭司は存在しなかったでしょう。この大祭司像は、イエス様をキリストとして受け入れる信仰を通して、はじめて『聖書(旧約)』から気づいた理解といえるのです。

このような独特な大祭司理解を基にして、キリストが大祭司であり、従来存在した大祭司以上の大祭司であることを後半部分で展開しています。最初に、「同じようにキリストも、大祭司となるという栄誉をご自分で得たのではなく、こう言われた方がお与えになったのです。『あなたは私の子、私は今日、あなたを生んだ。』」(ヘブル5:5)とあり、キリストも同様にして大祭司としての栄誉を主なる神様から受けたことについて、詩編の引用(第2編7節)によって説明されます。この部分は、共観福音書の山上の変貌の箇所や、本日のヨハネ福音書の記述を想起させますが、それらの記述を超えて展開していきます。「また、他の箇所で、こう言われています。『あなたこそ永遠に、メルキゼデクに連なる祭司である。』」(ヘブル5:6)とキリストが、神の子であると同時にメルキゼデク

に連なる永遠に祭司であると論を進めるからです。この説明も詩編の引用（第110編4節）を用いています。ここでメルキゼデクの名前が出てくるのは唐突ですが、二つの理由があります。一つは引用した詩編にあることです。もう一つは、メルキゼデクは「創世記」の登場人物ですが、祭司の中でも特別であり、ことにその死が描かれていないので、永遠に生きているという理解もあったからです。

ただし、キリストが永遠の祭司になったのは、引用した詩編にそう書かれていたからではありません。その説明が7節以下にあります。「キリストは、人として生きておられたとき、深く嘆き、涙を流しながら、自分を死から救うことのできる方に、祈りと願いとを献げ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました」（ヘブル5:7）、つまりキリストは、人間としての苦しみ、しかしふつうの人生ならば経験しないような苦しみを経験し、それでも祈りと願いという供え物を捧げ、御自身を犠牲として捧げたが故に、全く大祭司にふさわしい存在となったのです。また単に苦しまれただけではなく、「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみを通して従順を学ばれました。」（ヘブル5:8）とある通り、苦しみを単に苦しいだけの事柄としないで、それを主なる神様への従順さへと結びつけたのです。そしてそれゆえに、「そして、完全な者とされ、ご自分に従うすべての人々にとって、永遠の救いの源となり、神によって、メルキゼデクに連なる大祭司と呼ばれたのです」（ヘブル5:9-10）。つまり、キリストに従う者に対して永遠の救いの基となり、キリストは今までの祭司とは全く異なったメルキゼデクに等しい祭司となったのです。

この大祭司論は、端的に言えば、古い祭司制度の終焉と新しい祭司制度の開始を意味しています。ここにおいて、イエス様をキリストと信じる教会の教えが、ユダヤ教から明確に決別したともいえます。この大祭司キリスト論は『聖書（新約）』の中でも独特ですが、神学的本質は他の文書と一致します。そもそも、祭司には、主なる神様と人間との橋渡しという役割がありますが、イエス・キリストが、仲保者として主なる神様と人間との、また人間の現実と主なる神様の求める真実との橋渡しであることを、大祭司キリスト論は説明しているのであり、ほかの新約文書もその趣旨からは離れていないからです。

イエス様は、弱さを持った人間でしたが、罪を犯されませんでした。その方がわたしたちのそばにいつもいてくださることを深く認識する時、イエス様が神の子であり、わたしたち人間の罪を解決して下さる方であると、理解出来るのです。わたしたちも当然、人間として様々な弱さを持ちます。人間の弱さそれ自体は、罪ではないのですが、弱さは罪に結び付きやすいのです。弱さを隠すため、ごまかすため、あるいは克服するために様々な罪を犯してしまうのです。しかし、弱さは他者を思いやる方向へと向けることができます。

イエス様がともにいてくださると感じた時、わたしたちは弱さを隠すまたは飾る必要もないことに気づきます。わたしたちの罪をイエス様が担ってくださったからです。それゆえ、むしろ、わたしたちの弱さは、現実に生きているわたしたちが、主なる神の真実（すなわち愛）を反映させるために用いられる要素となるのです。わたしたちは、礼拝を通して、そのイエス様がいつもおられることを確認します。そしてその弱さゆえに、他者に思いやる方向へと歩みとき、わたしたちの交わりから争い、悲しみ、苦しみの多いわたしたちの世界に、主なる神様の真実（愛）を示すことができるのだと思います。